古英語詩『ベオウルフ』と『創世記 A』における ‘day’ と ‘night’ の副詞的用法と前置詞句の対立

―― その語彙的傾向 ――

中　西　志　門

京都大学大学院　人間・環境学研究科　共生人間学専攻
〒 606-8501　京都市左京区吉田二本松町

抄録　古英語は名詞に 4 つの格（主格，属格，与格，対格）を有し，そのうち主格以外の全てが副詞的に機能し得た．このような名詞の副詞的用法に関する先行研究は極めて限定的であり，曲用形ごとの意味，機能的違い，前置詞句との競合関係は十分に明らかにされていない．

現代英語を対象とした研究でも指摘されているように，名詞の副詞的用法は語彙的に限定的である．古英語においても時を表す語彙の多くは副詞的格か前置詞句のどちらかのみで用いられる傾向があるなかで，*dæg* ‘day’ と *niht* ‘night’ の 2 語はいずれの用法でも頻繁に用いられる．そのため，本論文は古英語における各表現の用法の違いを明らかにするため，この 2 語に対象を絞って用例の分析を行う．その結果，この 2 語が特に複数与格で異なる振る舞いを示すことを明らかにする．また，その傾向の違いは，2 語の音節構造の違いとそれに伴う韻律的要請によって説明できることを指摘する．

1. は　じ　め　に

通常，文中の時・場所・様態といった意味は，副詞や前置詞句によって表される．しかし，少なくない言語で，前置詞を伴わない名詞句が同様の機能を担うことがある．GB 理論では，音形を持つ名詞句は格を付与されなければならないという格フィルターが存在するため，I saw John that day.（Larson, 1985, p. 595）のような文における that day のように動詞や前置詞に統率されておらず，したがって一見して格が付与されない名詞句がどのようにして生起するのかという点が問題となる．この現象に関して，Larson（1985）は一部の名詞がその意味的特性から持つ素性［＋F］が名詞句全体に受け継がれ，それによって斜格が付与されて認可されると主張した（p. 607）のに対し，Barrie & Yoo（2017, p. 507）は *place* のような名詞は語彙的に θ 役割を持っているとするなど，格付与や θ 役割がどのように関わっているという観点から議論が行われてきた．その際，どのような場合に前置詞を伴わない名詞句が生起するかは特定の語彙の持つ特徴に帰せられていた．例えば Larson は *day*, *place*, *way* などの一部の名詞だけがこのような力を持ち，たとえ意味的に類似していても *location* などの名詞は同様の力を持たないとした（p. 602）．このように細部においては異なるものの，先行研究では現代英語が主要な分析対象であり，またその主な関心事はどのようにしてこのような名詞が認可されるかという理論的な側面であった．

こうした理論的先行研究では英語が主な分析対象となっている一方，ドイツ語や 11 世紀中頃まで話されていた古英語のような形態的格の豊かな言語においては，名詞の斜格が副詞的に用いられた．例えばドイツ語では例（1）のように属格（a）や対格（b）という名詞の曲用形が副詞的に用いられる．

（1）　a．*eines Tages* ‘one day’

b．*den ganzen Tag* ‘all the day’

このように名詞の曲用形が副詞的に用いられる現象については理論的先行研究で扱われることは少なく，いまだに理論的説明が十分になされているとはいえない．特に，古英語では名詞に有する4つの格のうち主格を除く曲用形が副詞的格として機能し得たため，*dæg* ‘day’ という語を用いた時間表現には，属格単数 *dæges*，与格単数 *dæge*，与格複数 *dagum*，対格単数 *dæg*，対格複数 *dagas* さらに，前置詞句が存在したことになるが，これらの表現が古英語で互いにどのように使い分けられていたのかはいまだに十分明らかにされているとは言えない．従って，理論的説明を行う前提となる，現象の記述が十分になされていないと言える．

本論文では，このように名詞の格曲用形が動詞の項や形容詞などの補語，名詞修飾語としてではなく，副詞として機能しているものを副詞的格と呼ぶこととする[1]．副詞的格の中にはドイツ語 *heute* ‘today’（＜古い具格形 **hiu tagu* ‘this day’）や英語の *whilom*（＜*hwīlum* ‘sometimes’, *hwīl* ‘while’ の複数与格）のように固定化し副詞として定着した例も見られる．Brinton（2017）は *hwīlum*＞*whilom* の発展について，「初期の *whilom* の変化は，*while* のそれと同様文法化のプロセス通りであったが，のちに形容詞用法という明らかに反対の変化を遂げる」（p. 75）とし，文法化の一方向性に疑問を投げかける例が存在することを指摘している．そのため，副詞的格は名詞や副詞というカテゴリー間の問題にも大きく関わっているといえる．また，異なる格曲用形がそれぞれどのような機能を担い，前置詞句と異なっていたのかを詳細に調べることで，文法化の過程を明らかにするという通時的研究だけでなく，共時的にどのような理論的説明の枠組みがふさわしいのかを考えるという貢献にもつながることが期待できる．

2. 先 行 研 究

格の副詞的用法の存在は広く認知されており，古英語の基本的文法書である Campbell（1983, p. 276）や Sievers & Brunner（1951, p. 274）にも格が副詞的に用いられる旨が記述されている．しかし，副詞的に機能する3つの格がどのように使い分けられているのか，という点に関してこれらの文法書は沈黙している．実際，この現象を正面から扱った先行研究は少なく，Wülfing（1894）や Shipley（1919）などの記述的研究が意味の区別を述べずに用例を列挙しているにとどまっている．与格のみを対象とした研究には，Callaway（1922）と Pasicki（1998）があるが，これらは他の曲用形，あるいは前置詞句との対立関係は検証していない．一方，対格と前置詞句の競合関係を調査した Yamakawa（1980）をはじめとする，機能的に競合すると考えられる前置詞句との関係を扱う先行研究には Kniezsa（1986，1991），Sato（2009）などがあり，個別の格の意味への言及はなされている．これらに散見される記述をまとめると，対格は時間の継続（Behaghel, 1923, pp. 721f, Dal, 2014, pp. 16f, Callaway, 1922, p. 129）を，与格はある出来事の起きる時点（Kniezsa 1986, p. 424）を表すとされる．一方，属格に関しては継続（Traugott, 1972, pp. 78f，Kniezsa, 1986, p. 424，Koike, 2004, p. 39），時点（Koike, 2004, p. 39），反復（Kniezsa, 1986, p. 424）を表すとする記述がみられ，統一的見解がない．最も包括的な記述的文献である Mitchell（1985, p. 586）も“The adverbial genitive defines the time within which something happens”としており，継続・時点という観点からの定義を避けていることがわかる．

しかし，こうした先行研究では各曲用形と前置詞句の意味的対立に基づく体系的記述はなされておらず，各曲用形がそれぞれどのように用いられているのか，前置詞句とはどのように使い分けられていたのかが明らかになっているとは言えない．また，Yamakawa（1980），Kniezsa（1986, 1991），Sato（2009）は前置詞句の増大といった通時的変化に注目しているため，ある共時的な言語段階における競合関係を詳細に記述したものではなく，これらの研究において，それぞれの格の意味は，特段の議論を経ずに半ば前提のようにされている．

その上，先行研究においては散文作品が分析対象とされることが多いが，これにはいくつかの問

題があることを指摘できる．Sato（2009）が調査した 6 つの散文作品のうち，時点を表す副詞的格が最も多く確認された『年代記』A 写本では，時点を表す用例の大半（66 例中 58 例）が *þy*（*ilcan*）*geare* ‘the（same）year’ という，『年代記』という作品の性質上頻出する固定表現であった（2009, p. 34）．さらに，Sato は古英語後期にかけてより分析的な表現法である前置詞句が時点を表す意味で増大したとしているものの[2]，これら 6 つの作品間での差異が大きく，ともに前期の作品に分類されている『年代記』A 写本と古英語訳の『哲学の慰め』[3]では，後者での前置詞句の割合は後期散文である Wulfstan の『説教集』よりも高いほどであることも指摘している．つまり，散文作品では，作品間で副詞的格の用法が大きく異なっており，また表現にも偏りが多く，副詞的格の使用には制限が多かったと指摘できる．

3．分　　析

前節で見た先行研究の問題点を整理すると，① これまで副詞的に用いられる 3 つの曲用形それぞれと前置詞句間の競合関係を包括的に扱った研究はほとんどないこと，② 記述を行なっていても丁寧な実例の調査に基づくものではなく，副詞的格と前置詞句の競合関係の調査時の前提としていること，また，③ 先行研究では副詞的格の用法が限定的である散文が主な対象となっていること，を指摘できる．こうした問題点を克服するため，本論文ではあえて韻文作品を調査対象とする．これは Sato（2009）が “Adverbial case-forms are common in OE poetry which is written in archaic language.”（p. 41）と指摘しているように，韻文作品ではより多くの副詞的格の例が確認できるためである．

分析の対象としては『ベオウルフ（以下，Beo.）』（3182 行）と『創世記 A（以下，GenA.）』（2319 行）を選んだ．いずれの作品も脚韻ではなく，ゲルマン古来の頭韻という技法が用いられている．Beo. は古英詩の最古層に属すると考えられており（Fulk et al., 2008, p. cli），ラテン語原典からの翻訳ではない．一方，GenA. は旧約聖書の『創世記』のラテン語からの翻訳であるものの，比較的自由な翻訳だとされている．その成立年代も Beo. と同時期とされている上（Doane, 1978, pp. 36f），この二作品で約三万行といわれる古英詩全体の 6 分の 1 弱のコーパス量を占めている（Fulk & Cain, 2013, p. 27）．そのため，この二作品の調査を通じて古英語古来の副詞的格の用法をある程度明らかにできると考えられる．

分析対象の語彙は *dæg* ‘day’ と *niht* ‘night’ の 2 語に限定した．これには次の理由がある．Beo. 中で用いられている 18 の時間名詞が副詞的用法，あるいは前置詞句（合わせて副詞類と呼ぶ）で用いられている分布を表 1 に示すと，語彙によってどちらの表現法で用いられるか傾向があることがわかる[4]．多くの語は副詞的用法でのみ用いられているが，*morgen* ‘morning’ などの一部の名詞は前置詞句のみで現れ，*missēre* ‘half year’ のように属格形で代名詞や数量詞を修飾する形でしか現れない語もある[5]．現代英語での副詞的名詞の使用が語彙的に限定されていることは Larson（1985）や Barrie & Yoo（2017）が指摘しているとおりであるが，古英語においても語彙的な制限があった

表 1　Beo. において，時間名詞が副詞類として用いられている用例数[8]

	副詞的用法		前置詞句	
	単純語	複合語	単純語	複合語
dæg ‘day’	4	1	6	9
niht ‘night’	9	2	5	0
morgen ‘morning’	0	0	4	0
hwīl ‘space of time’	26	0	2	1
tīd ‘time’	2	0	0	3
stefn ‘turn, time’	2	0	0	0
stund ‘time’	1	0	0	0
fyrst ‘time’	3	0	1	0
sīð ‘time（回）’	9	0	1	0
dōgor ‘day’	7	0	0	0
mǣl ‘（appointed）time’	4	0	1	0
sǣl ‘season’	0	0	1	0
fæc ‘while’	1	0	0	0
þrāg ‘time’	4	0	0	0
gear ‘year’	1	0	0	0
ūhta ‘dawn’	0	0	1	0
winter ‘winter’	3	0	0	0
＋gen	14	0	0	0

ことがわかる．これに対し，分析対象とした 2 語は副詞的用法と前置詞句の両方で多用されている．そのため，こうした語彙的出現傾向の影響を除外し，格ごとの役割を明らかにした上でこれらの表現の競合関係を調べるためには，*dæg* ‘day’ と *niht* ‘night’ の 2 語が適していると考えられる．

また，今回対象とする前置詞句は，同時性を表し副詞的格と競合しうる *in*, *on* に限定し[6]，*æfter* ‘after’ のように時間の前後関係を表すものは除外した[7]．

以降では Beo. のテキストとして Wrenn（1973）を，GenA. のテキストとして Doane（1978）を用いて，この 2 語の用法を詳細に検討する[9]．

副詞的対格は Beo. で用いられている副詞的格の中でも *dæg*, *niht*, *hwīl*, *tīd*, *fyrst*, *fæc*, *þrāg* の他に，数や *fela* ‘much’, *lȳt* ‘little’ のような属格名詞によって修飾される語でも用いられるなど，語彙的制限が少なく，Beo. では 33 例がみられた．その上，全ての用例が時間的継続を表す文脈で用いられていた．反対に時間の継続を表す文脈では前置詞句は用いられていなかったため，副詞的用法と競合しうる意味で前置詞句が用いられている用例はみられなかった．

dæg と *niht* の 2 語に限定すると，今回の調査範囲では 5 例確認され，単数，複数いずれでも副詞的に機能し，例（2）や（3）のように形容詞や数詞[10]によって修飾されることもあれば，例(4)のように修飾語なしの複合語として用いられることもある．

（2）*Heht ðā þæt heaðo-weorc | tō hagan*
ordered then that fight to entrenchment
bīodan || up ofer ecg-clif, | þēr þæt eorl-
announce up over steep-cliff there that band-of-
weorod ||morgen-longne ***dæg*** *| mōd-giōmor*
warriors lasting-a-morning day.ACC sad-at-heart
sæt, || bord-hæbbende, | bēga on wēnum, ||
sat shield-bearer both.GEN.PL on expectation
ende-dōgores | ond eft-cymes || lēofes monnes.
last-day.GEN and return.GEN dear.GEN man.GEN
「（ウィーラーフは）戦いについて崖の上にある陣地に使いをやった．そこでは家臣たちが**朝の間中**，親愛なる人物の死と帰還の両方を予測して心配して座っていた」
（Beo. 2894a）

（3）*git on wæteres cēht || **seofon niht***
you.DU on water.GEN power seven nights.ACC
swuncon
laboured
「あなた方二人は **7 夜**，水の上にあって苦難を経験した」
（Beo. 517a）

（4）*„þu scealt wideferhð | werg, þinum*
you shall forever accursed your
breostum || bearme, tredan | brade eorðan,
belly bosom.DAT? walk-on broad earth
|| faran feðeleas, | þenden þe feorh wunað,
go footless while which life remains
|| gast on innan. | þu scealt greot etan
spirit on inside you shall dust eat
|| þine ***lifdagas***.“
your days-of-life.ACC
「お前は永遠に呪われ，お前の腹で，へそで広い大地を歩き，足を持たずに命のある限り，魂が中にある限り歩く．お前は塵をお前の**生涯の間**食べなければならない．」
（Gen A. 910a）

副詞的与格は全 8 例が確認された．用法が時間の継続に限定されていた対格とは異なり，副詞的与格は用いられる名詞や数によって，時点（5a）や反復（6）を表した．*dæg* と *niht* が副詞的単数与格で用いられている例は，先行研究間で格について意見の一致を見ない *sinnihte* ‘perpetual night’[11] 以外みられず，ほぼ全ての用例が複数であった．

（5）a. *swā hine* ***fyrn-dagum*** *|| worhte*
so him.ACC far-days.DAT made
wǣpna smið
weapons.GEN smith

「（その兜は）**古の日に**武器職人が作った」

（Beo. 1451b）

b．*þone　on **geār-dagum** | ‘Grendel’*
the.ACC on days-of-yore.DAT Grendel
nemdon
named.3PL
「彼を人々は**古の日に**グレンデルと名付けた」

（Beo. 1354a）

Magoun（1953, p. 450）によると（*on*）*fyrn-* / *gear-dagum* は「かつて」という意味を表す定型句であり[12]，古英詩において頻繁に用いられたという．例文（5a）はベオウルフのかぶっている特定の兜の説明であるため，反復ではなく過去において完結した時点を表しており，（5b）も同様に過去において完結した時点を表していると考えられるため，この表現では前置詞の有無が意味に違いをもたらさないと思われる．しかし，前置詞なしの用例は，（5a）の Beo. 1451b と GenA. 1655a に 1 例ずつ見られるだけなのに対し，（5b）のように前置詞 *on* を用いた表現は 10 例あり，より一般的であることがうかがわれた．

（6）*Hē gehēold tela || fīftig wintra | —wæs ðā*
he ruled well fifty winter.GEN was then
frōd cyning, || eald ēþel-weard— |
old king old guardian-of-nation
*oððæt ān ongan || deorcum **nihtum** |*
until one began dark.DAT.PL nights.DAT
draca rīcsian, || sē ðe on hēaum hofe
dragon rule the which on high residence
| hord beweotode, || stān-beorh stēapne ;
treasure watched stone-barrow steep
「彼（ベオウルフ）は 50 年にわたって良く治め，老成した王，老いた民の守護者となったが，高き塚で財宝を守り，険しい洞窟に住む竜が**夜な夜な**暴れるようになった」

（Beo. 2211a）

一方，（6）ではベオウルフ治世の晩年に竜が悪事を働くようになった情景が描かれており，反復的動作を表していると解釈できる．このような用法は *niht*（および *middel-niht* ‘midnight’）の与格複数に限定されており，*dæg* では見られなかった．また，前置詞句も見られないなど，*dæg* との用法の差異が目立った．

また，前置詞句でのみ見られた用法としては，（7）のようにある動作が達成されるまでの期限を表す例がある．この用例は今回の調査範囲では 1 例しか見られなかったものの，他の作品でも *on*＋ 数詞 ＋*dagum* という構文で同様の例が見られた[13]．

（7）*Geworhton ðā | Wedra lēode || hlēo on*
built the Weder.GEN.PL people shelter on
hōe, | sē wæs hēah ond brād, || wēg-līðendum
promontory the was high and broad seafarers.DAT
| wīde gesȳne, || ond betimbredon | on tȳn
widely visible and built within ten
***dagum** || beadu-rōfes bēcn*
days.DAT.PL war-renowned.GEN beacon
「ウェデルの人々は岬に，広く舟人たちに見える高く，大きな陵を築き，そして彼らは **10 日で**戦いに勇敢な者（ベオウルフ）の墓碑を建てた」

（Beo. 3159b）

また，これらの用例において用いられているのはすべて複数形であるが，これらは必然的に複数的な意味を表しているわけではないと考えられる．例えば（5）が過去における時点ではなく，反復や継続を表しているのではないかと考えることも可能ではあるが，あくまで時点を表していると考える根拠は文脈以外にもある．単数の意味であるにもかかわらず複数形が用いられる例は他にもみられ，例えば（4）の例で *þinum breostum* は蛇の「腹」のことを指しているため単数としか解釈できないが，複数与格で現れている．このことから，他の屈折語尾と比べて有標であった複数与格語尾 *-um* が，具格を表すマーカーとして使用されていた可能性があり，与格複数であっても時点を表し

ていることは不思議でないと思われる．

先行研究で属格の意味記述について明確な傾向が見られなかったことは2節で指摘した通りであるが，今回調査した範囲でも属格自体に明確な意味の傾向を示すことはできなかった．例えば，時点（8）や習慣（9）として解釈できる例が見られたが，‘day and night’ という成句で用いられている場合には習慣，どちらか単体の場合には時点と解釈できるため，属格自体がそのような意味を表しているのではないと考えられる．また，副詞的格の典型例として挙げられるのが属格であるにもかかわらず，今回の調査範囲からは6例しか確認できず用法は限定的であることがわかった．

（8）*Com* ***nihtes*** *self,* || *þær se waldend*
came night.GEN himself where the ruler
læg | *wine druncen.*
lied wine.DAT drunk.PP
「（神は）主人（ゲラル王アビメレク）がワインに溺れて横たわっているところへ**夜に**自ら来た．」
（GenA. 2634b）

（9）*Swā giōmor-mōd* | *giohðo mēnde,* || *ān æfter*
so sad-of-mind sorrow mourned one after
eallum, | *unblīðe hwearf* || ***dæges ond***
all sorrowful wandered day.GEN and
nihtes, | *oððæt dēaðes wylm* || *hrān æt*
night.GEN until death.GEN surging touched at
heortan.
heart
「かくして心悲しきものは他の者が世を去った後，嘆きつつ，**昼も夜も**悲しみのうちに彷徨ってのちに死んだ」．
（Beo. 2269a）

4. 曲用形ごとの意味分布と語彙的傾向のまとめ

第3節の分析から，それぞれの曲用形の用法の分布は次の表2のようにまとめることができる．

表から明らかなように，それぞれの曲用形間には明確な用法の違いがあったといえる．副詞的対格は例外なく時間的継続を表しているのに対し，与格は文脈や用いられる形式によって異なる意味を表し，属格も状況によって別様に解釈された．与格は多様な意味を表しているものの，（*on*）*fyrn / gear-dagum* の場合には「かつて」という意味を表し，文脈や形式によってそのパターンは一定であった．また，（5）で見たように時点を表す用法では前置詞 *on* の有無は意味には影響を及ぼしていなかった．前置詞 *on* には時点以外にも期限を表す用法が見られたが，その場合には *on*＋数詞＋*dagum* という表現法が用いられていた．これに対し属格の用例数は限定的であり，語彙的にも多様性が少ない．先行研究において属格の用法に関する統一的見解が見られず，点的とも継続的とも記述されていた要因は，このようにどちらの例を見るかに左右されていたのではないかと推測される．‘day and night’ という成句の場合には継続的，*dæg* と *niht* のどちらか単体の場合には点的に解釈できた．先行研究において属格が点的とも継続的とも記述されていた要因は，このようにどちらの例を見るかに左右されていたのではないかと推測される．同時に，成句 ‘day and night’ とそうでない場合に解釈が大きく異なるのは，属格自体が時間の継続性や点性を表しているわけではないということも示唆しているのではないかと思われるが，これは今後の課題とする．

表2 各曲用形の意味別の分布

	ACC.	DAT.		GEN.	
	継続	時点	反復	継続	時点
Beo.	4	1	5	1	4
GenA.	1	1		1	

次に，副詞的用法と前置詞句別の分布を比較すると，表3のようにまとめることができる．対格は *æfter* ‘after’ のような出来事の前後関係を表す前置詞とは共起するものの，*on*, *in* などの副詞的格と競合しうる機能では確認されなかった．また，時間的継続を表しうる前置詞としては *þurh* ‘through’ などが存在するが，今回調査対象とした作品からは確認されなかった．したがって，今回調査した2つの古英詩では，時間の継続を表す表現において副詞的格と前置詞句は競合関係にな

表 3　dæg と niht の曲用形ごとの分布

	SG		PL	
dæg	Adv	Prep	Adv	Prep
GEN.	1（1）			
DAT.		6（6）	3（0）	10（3）
ACC.	2（2）		2（1）	
niht				
GEN.	3（3）			
DAT.		3（3）	5（3）	
ACC.	1（1）		1（1）	
dæg and niht				
GEN.	2（2）			
DAT.				
ACC.				

（括弧内は単純語の，外は複合語を含めた用例数）

表 4　時点を表す与格の分布

	SG		PL	
dæg	Adv	Prep	Adv	Prep
Beo.		3（3）	1（0）	6（1）
GenA.		6（4）	2（0）	4（2）
niht	Adv	Prep	Adv	Prep
Beo.		3（3）	5（3）	
GenA.				

（括弧内は単純語の，外は複合語を含めた用例数）

かったということができる．また，Sato（2009）の調査でも，対格は後期の散文においても時間の継続を表す表現の 80% ほどを占めていたことが指摘されており（p. 174），強固な用法を確立していたことがうかがわれる．

それに対し，副詞的格として例示されることの多い属格や与格は，対格よりも生起環境が狭く，その用法に制限があった．例えば，属格形 *dæges* は *dæges ond nihtes* という成句で用いられることがほとんどで，単体では Beo. 1935 の 1 例しか確認されなかった．それに対し，*nihtes* 単体は 3 例見られた．Shipley（1903, p. 111）は，これを前置詞句 *on dæge* との機能的競合に起因しており，また形態的にも *dæges* は名詞修飾の用法と形式的に混乱しうるが，*nihtes* はそのような混乱を生じさせえないためであると指摘している．

時点，あるいは反復を表す例で与格が用いられる際には，副詞的 *dagum* も見られたものの，前置詞で用いられることの方が普通であったと考えられる．必ず副詞的に用いられていた対格とは異なり，前置詞句がしばしば用いられたのには，与格が対格と比べて機能過多に陥っていたからではないかと考えられる．複数与格は時点，反復以外にも，*on*＋数詞＋*dagum* では期限を表し，また Beo. と GenA. には見られなかったものの，副詞 *ær* とともに用いられて「～日前」を表すこともできる[14]など，1 つの形式で多くの機能を担っていたことがわかる．Sato（2009, p. 176）が “prepositions are in general more emphatic than case-forms.” と述べている通り，前置詞を用いることによって，より意味を限定することができるのであれば，対格はすべての用例で時間的継続を表していたため，その意味には曖昧性が存在しないが，与格は意味を明確にするために前置詞を必要としたのではないかと考えることができる．

また，曲用形ごとの機能とは別に，*dæg* と *niht* の用法には異なる使用傾向が見られた．すでに *dæges* が単体で用いられることが限定的であることを確認したが，表 4 を見ると与格複数形の用法の分布にも興味深い語彙的傾向があることがわかる．*dæg* の与格複数形 *dagum* は副詞的用法よりも前置詞句で用いられることの方が多く，単純語が副詞的に用いられる例は確認されておらず，3 例すべてが複合語であった．また，複合語でも基本的には前置詞句で用いられていたのに対し，*niht* の単純語と複合語の間には極端な出現傾向の違いはなく，前置詞句での用例も確認されなかった．この傾向は対象を古英詩全体広げても見られる．Dictionary of Old English Corpus で調査すると，副詞的 *dagum* は 13 例（内，単純語は 3 例），前置詞句は 64 例（内，単純語は 14 例）に対して *nihtum* は副詞的用例が 17 例，前置詞句が期限を表す用例で 1 例見られるのみであった．属格での場合と異なり，与格複数形 *dagum* と *nihtum* はともに通常の曲用形であり，名詞修飾語としても機能しないため，*dagum* が前置詞で，*nihtum* が副詞的に用いられる著しい傾向が見られることには，別の理由があると考えられる．

5. 韻律からの考察

4 節では副詞的格の用法には曲用形ごとの違いが見られ，同じ曲用形でもその現れ方に語彙的な違いがあることを示した．以下では複数与格形に見られた語彙的傾向の違いが，韻律によって説明できることを指摘する．

3. 2.節で述べたように，*on X dagum* は「かつて」という意味を表す詩的定型句（poetic formula）だったと言われており，*dagum* が主に複合語で用いられる要因の 1 つには，この poetic formula が関わっていると想定される．しかし，この formula は前置詞の有無まで規定していないため，*dagum* が前置詞句を好むのに対し，*nihtum* は副詞的格を好む説明にはなっていない．そのため本節では，両者の語彙的傾向の違いを説明すべく，韻律の観点から再検討していく．

dagum と *nihtum* の音節構造に注目すると，前者は短母音の開音節＋閉音節，後者は閉音節＋閉音節であるという違いを指摘できる．この違いは頭韻詩の韻律において大きな違いをもたらす．頭韻詩の一行は 2 つの半行分けられる．1 つの半行には強勢（ / ）が置かれ，頭韻しうる位置（lift）と無強勢（ X ）あるいは副強勢（ \ ）が置かれる位置（drop）が 2 つずつある．この lift となりうるのは通常，重音節（閉音節，あるいは長母音か二重母音の開音節）である．以上を踏まえると，*nihtum* は閉音節で始まるため lift となりうるのに対し，*dagum* の前半部分は重音節ではないため，通常 lift として機能しない．つまり，*dagum* の *da* はそれ自体では lift になり得ないため，複合語として現れ，前半部の要素を変えることで様々な語と頭韻を踏むのに対し，*nihtum* はそのような操作を必要としないため，両者の現れ方が異なっていたのではないかと考えることができる．

半行中の主強勢，副強勢，無強勢の位置によって分類される頭韻詩の 5 基本的型（A, B, C, D, E）[15] に照らすと，（6）の *deórcum nihtum* は A 型となるのに対し，**deórcum dagum* では *da*–と言う音節が強勢を受けられず，いずれの韻律型にも当てはまらないため不適格になることがわかる．軽音節が強勢を受ける例外的環境は，直前の音節に強勢がある場合，または 2 つの軽音節が 1 つの重音節の代わりとして強勢をうける場合（resolution）である（Pope & Fulk 2001, p. 142）[16]．前者は例（7）の *on týn dagum* に見られ，第一 lift として強勢を受ける *týn* の直後に位置している *da* も強勢を受ける．一方，例（10）の *dǽges ond níhtes* は resolution の例であり，ここでは 2 つの軽音節 *dæ* と *ges* が 1 つの重音節として強勢を受けることにより lift を占め， A 型の韻律型を構成している．先程の **deórcum dagum* は resolution を用いた場合には半行を構成する音節数が，その下限である 4 音節を下回るため（Terasawa, 2011, p. 49），resolution が起きた場合にも不適格である．また，1 つの drop は複数の無強勢を受けることができるため，同じ C 型（X / \ X）に属する例（5）の *swā hine fyrn–dagum* と *þone on geār–dagum* では，いずれの例でも 1 つ目の drop が三つの無強勢を受けており，後者における前置詞の存在は韻律的要請によらないこともわかる．したがって，このような例では副詞的格と前置詞句の対立関係を統語的理由に求めることができると思われるが，今回調査対象とした 2 作品では用例数が十分ではないため，今後調査範囲を広げることが求められる．

最後に，*dæg* が主に前置詞句で用いられるのに対して，*niht* が前置詞と共起しない点に関しても韻律的理由が考えられることを指摘する．古英詩の韻律型のうち，A 型（ / X / X）と D 型（ / / \ X）では，最初の lift の前に余剰な音節が現れる anacrusis という現象が起きる場合がある．今回確認された *nihtum* の例はすべて A 型の半行の後半に生起していたため，anacrusis が起きれば **on | deórcum | níhtum* という表現も可能になると思われるが，実際にはそのような用例は確認されなかった．『哲学の慰め』の散文版と韻文版の翻訳を調査した Sato（2002）は，両作品における前置詞の現れ方が，Bliss（1967, p. 40）によって指摘された韻律型に関わる制約を用いると説明できると主張した．Bliss は A 型を，中間休止（caesura）の位置によって 3 区分し，/ X | / X のような caesura が中心にくる型は anacrusis を許容

しないと指摘した．したがって，*nihtum* が前置詞句で生起しないのは，／X | ／X のような A 型では前置詞が anacrusis の位置を占めることができないためであると言える．

6. 結論と今後の展望

本論文では，古英語において副詞的に機能し得た 3 つの格の用法を詳細に記述し，それらの前置詞句との機能的競合関係を検討した．調査の結果，対格は時間的継続を表すもっとも普通の用法であったのに対し，与格は時点，あるいは反復を，属格は継続，あるいは時点を表していたが，後者の用法は用例数も限定的であることを示した．特に与格は文脈や前置詞の有無によって多様な意味を表しており，前置詞を用いて意味をより明確に示す必要があったのではないかと考えられる．

また，同じ複数与格でも，韻文においては用いられる語の音節構造や，韻律型によって語彙的な統語構造が異なることも明らかにした．その際，そのような語彙的傾向の違いは両者の音節構造の違いに起因する韻律的条件に帰せられ，*nihtum* が前置詞句で現れないのは A 型の韻律型に関連する制約に起因することを指摘した．以上の事実は，一見散文よりも自由に副詞的格が用いられている韻文においても，対格以外での副詞的格の用法には韻律による制約が大きく，前置詞の使用という機能的な面にも大きな影響を及ぼすということを示している．

しかしながら，そもそもなぜ *nihtum* が A 型を好むのか，また，（*on*）*X dagum* において前置詞が用いられる場合とそうでない場合に，どのような意味機能上の差異があるのかは今回の調査では明らかにできなかった．そのうえ，この 2 語の振る舞いの差に韻律が大きな影響を及ぼしていることは確かであるため，今後は韻律的影響を除いた上で，副詞的格と前置詞句の対立を検証していくことがもとめられる．

注

1） 例えば，GenA.（1072 a）*frod fyrndagum*「古の日々において年老いている」では，形容詞 frod の補語として複数与格が用いられているが，このような例は副詞的格の用例からは除外する．

2） Sato（2009, pp. 171f）しかし，特定と絶対与格に関してはむしろ増えている．

3） 『哲学の慰め』はローマの哲学者ボエティウスの著作で，アルフレッド大王によって古英語に翻訳されたが，アルフレッドの翻訳は自由なもので直訳ではないとされている（Sato 2009, p. 20）．

4） 表 1 には時間名詞が副詞類として用いられている用例数を，副詞的用法と前置詞句，さらに単純語と複合語に分けて提示した．対象とした語彙は，古英語の語彙を意味分野別に分類した資料である *A Thesaurus of Old English* に掲載されている時間名詞中，『ベオウルフ』で使用されているものを選んだ．

5） 例えば，Beo. 153, 2620 の *fela missēra*「半年の多く＝長年」のようなものは ＋gen に分類した．

6） 主な古英語の資料が残されているウエスト・サクソン方言において，*in* はあまり用いらなかった．（Kniezsa, 1986, p. 427）

7） 「格体系は最も豊かなものでも，形態的手段では基本的な副詞的関係しか表し得なかった」（Kniezsa, 1986, p. 424）

8） 格が不明な例は除外．

9） 刊本によって表記の方針が異なるため，同じ語でも例示の際に長音記号の有無が異なる場合もあるが（*geardagum* vs *gēar–dagum* 等），出典刊本の表記に従う．また，用例提示の際には，作品中における行の境（||）と半行の境（|）も明記する．

10） *niht* ‘night’ は子音語幹の女性名詞であり，形態的には単数・複数の区別ができないものの，修飾する数詞などによって複数形であることがわかる．

11） Doane（1978, p. 388）は *sinnihte* を与格だとしているが，Beo. において副詞的に用いられていると思われる箇所に関しては Heyne（1961, p. 191）は与格，Fulk et al.（2008, p. 434）は対格単数，Sedgefield（1913, p. 229）は対格複数としており，意見の対立が見られる．この語は子音幹女性名詞である *niht* に強調を表す *sin–*が付加されて形成されているため，同様に子音幹名詞であると仮定すると，*sinnihte* という語形は与格であると考えることができる．しかし，Heyne（1961, p. 192）によると，古ザクセン語叙事詩『ヘーリアント』において *suart sinnahti*（2146a）という語形が現れていることから，これが ja–幹名詞の対格単数である可能性も指摘されているという．いずれにしても，この語の格を確定するには決定的な根拠に欠けるため，今回の考察からは除外する．

12） poetic formula は特定の概念を表す際に慣習的に用いられ，また韻律的にも一定であるために詩の作成に頻繁に用いられた．Magoun（1953, p. 450）はベオウルフの冒頭に見られる *on gear–dagum* を例に，X に相当する部分を *gear–*, *fyrn–, ær–*などと変えることによって頭韻を踏ん

でいたとしている.

13) 例えば Gloria Ⅰ(23a) *þu gewrohtest, ece god,* | *ealle gesceafta* || *on syx dagum,* | *and on þone seofoðan þu gerestest*.「あなたは，永遠の神は，全ての被造物を 6 日で作り上げ，そして 7 日目に休まれた」.

14) 例えば，Death of Edgar (13b) *And him tirfæst hæleð* | *tyn nihtum ær* || *of Brytene gewat*「そして栄光ある戦士は，10 夜（日）前にブリテンを出発した/死んだ」.

15) Sievers (1893)の韻律型に従う.

16) 2 つの軽音節が resolution を起こしている際に/X̲ のように表す.

一次資料

Dictionary of Old English Web Corpus, compiled by Antonette diPaolo Healey with John Price Wilkin & Xin Xiang. (Toronto : Dictionary of Old English Project 2009).

Doane, A. N. (1978). *Genesis A : A new edition*. University of Wisconsin Press.

Dobbie, E. V. K., & van Kirk, E. D. (Eds.). (1942). *The Anglo-Saxon minor poems* (Vol. 6). Columbia University Press.

A Thesaurus of Old English. (2017). Glasgow : University of Glasgow. http : //oldenglishthesaurus.arts.gla.ac.uk/

Wrenn, C. L., (1973). ed. *Beowulf : with the Finnesburg Fragment*. fully revised by W. F. Bolton. London : Harrap.

参考文献

Behaghel, O. (1923). *Deutsche Syntax : Eine geschichtliche Darstellung : Die Wortklassen und Wortformen : A. Nomen und Pronomen*. Band. 1. Heidelberg : Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.

Barrie, M., & Yoo, I. W. (2017). Bare nominal adjuncts. *Linguistic Inquiry, 48*(3), 499-512.

Bliss, A. J. (1967). *The metre of Beowulf*. Oxford : Blackwell.

Brinton, L. J. (2017). *The evolution of pragmatic markers in English : Pathways of change* : Cambridge University Press.

Callaway, M. (1922). The dative of time how long in Old English. In *Modern Language Notes* 7(3) : 129-141.

Campbell, A. (1983). *Old English grammar*. Oxford : Clarendon Press.

Dal, I., & Eroms, H-W. (2014). *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. (*4th ed.*). Berlin/Boston : Walter De Gruyter.

Fulk, R. D., & Cain, C. M. (2013). *A history of Old English literature*. Malden : Blackwell.

Fulk, R. D., Bjork, R. E., & Niles, J. D. (Eds.). (2008). *Klaeber's Beowulf*. (*4th ed.*). Toronto : University of Toronto Press.

Heyne, M. (1961). *Beowulf mit ausführlicher Glossar*. Vol. 3. Glossar. Paderborn : Verlag Schöningh.

Kniezsa, V. (1986). Temporal relationships from Old English to Early Middle English. *Linguistics across historical and geographical boundaries : linguistic theory and historical linguistics* 1. (pp. 423-436). Berlin/New York/Amsterdam : Mouton De Gruyter.

Kniezsa, V. (1991). Prepositional phrases expressing adverbs of time from Late Old English to Early Middle English. In D. Kastovsky (ed.), (pp. 221-231). *Historical English syntax,* Berlin/New York : Mouton De Gruyter.

Koike, T. (2004). Analysis of the genitive case in Old English within a cognitive grammar framework, based on the data from Ælfric's *Catholic Homilies First Series.* PhD dissertation. University of Edinburgh.

Larson, R. K. (1985). Bare-NP adverbs. *Linguistic inquiry,* 16(4), 595-621.

Magoun Jr, F. P. (1953). Oral-formulaic character of Anglo-Saxon narrative poetry. *Speculum* 28.3 : 446-467.

Mitchell, B. (1985). *Old English syntax : volume 1 concord, the parts of speech, and the sentence*. Oxford : Clarendon Press.

Pasicki, A. (1998). Meanings of the dative case in Old English. Van Langendonck, W., & W. Van Belle, (eds.), *The dative : volume 2 : theoretical and contrastive studies*. Vol. 3. John Benjamins Publishing.

Pope, J. C., & Fulk, R. D. (2001). *Eight Old English poems : edited with commentary and glossary by John C. Pope,* ed. D. Fulk. (*3rd ed.*). New York - London : W. W. Norton.

Sato, K. (2002). Case forms and mid-phrases in the Old English Metres of Boethius : A Comparison with the prose versions. *Studies in Medieval English Language and Literature, 17*, 41-58.

Sato, K. (2009). *The development from case-forms to prepositional constructions in Old English prose*. Peter Lang.

Sedgefield, W. (1913). *Beowulf : edited with introduction, bibliography, notes, glossary, and appendices* (*2nd ed.*). Manchester : University Press.

Shipley, G. (1903). *The genitive case in Anglo-Saxon poetry*. Baltimore : The Lord Baltimore Press.

Sievers, E. (1893). *Altgermanische Metrik*. Halle : Max Niemeyer.

Sievers, E., & K, Brunner. (1951). *Altenglische Grammatik : Nach der angelsächsischen Grammatik von Eduard Sievers*. Halle (Saale) : Max Niemeyer.

Terasawa, J. (2011). *Old English metre : an introduction*. Toronto : University of Toronto Press.

Traugott, E. C. (1972). *A history of English syntax : A transformational approach to the history of English sentence structure.* New York & London : Holt, Rinehart and Winston, Inc.

Yamakawa, K. (1980). The adverbial accusative of

duration and its prepositional equivalent part I. Old and Middle English. *Hitotsubashi journal of arts and sciences*, 21(1) : 1–39.
Wülfing, J. E. (1894). *Die Syntax in den Werken Alfreds des Grossen*. T. 1. Bonn : P. Hansteins Verlag.
唐澤一友（2004）.『アングロ・サクソン文学史：韻文編』. 東京：東信堂.

The adverbial use of ‘day’ and ‘night’ in Old English poems “Beowulf” and “Genesis A” and their contrast to prepositional phrases : Towards an explanation for their lexical tendency

Shimon NAKANISHI

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606–8501 Japan

Abstract Old English possessed four nominal cases, namely nominative, genitive, dative, and accusative. All of which, except for nominative, could serve as adverbials. There are a limited number of studies about such uses of nouns and our understanding of the exact functional difference between each case–form and potentially competing prepositional phrases remains incomplete.

Just as studies on Modern English point out that such uses of nouns are lexically restricted, most Old English temporal nouns also show strong tendency towards one of these expressions, i. e., adverbial case or prepositional phrase. On the other hand, two Old English nouns *dæg* ‘day’ and *niht* ‘night’ are equally frequently used in both adverbial case–forms and prepositional phrase. This paper investigates these two words in two Old English poems. After having clarified the different usage of each adverbial case, the author points out that these two nouns show quite different behavior as to whether they are used adverbially or prepositionally. In the final section of this paper, the author argues that this tendency can be explained by metrical background.